

教師の授業力を高めるための授業研究の有効な進め方

— 校内研究の運営等を通して —

所属校：目黒区立中根小学校

氏名：鈴木 稔

派遣先：東京学芸大学教職大学院

キーワード：授業力向上・教員育成・校内研究・研究授業・研究協議会

I 研究の目的

学校の教育力は、教師集団の力量の総量によって決まる。東京都教育委員会による OJT ガイドラインには、「①社会状況や子供を取り巻く環境の変化に伴って、学校教育に対する都民の期待がますます高まり、学校の教育活動の充実が求められていること ②学校が教育力を向上させ、組織的に課題解決を図る力を付けていくためには、学校組織を構成する教師全体の資質・能力を高める必要があること ③現在、教師の大量退職と大量採用の時代にあつて、学校の中に急速に若手教師が増え、学校組織を支える一員として、若手教師を確実に育成することが大きな課題であること」が述べられている。教師の力量を組織で高めていくことは、現在の学校において、緊急の課題であると言える。

教師が多忙を極め、日常的に研修に多くの時間を割くことができない学校現場において、校内研究は、各学校の児童生徒の実態や教育課題等に関する日常の教育実践と結び付いて行われるものであり、教師にとってはもっとも身近な環境の中で行われる。また、年間を通してその時間が保障され、学校単位で組織的に行われている。この校内研究を活性化し充実させることは、教師の力量を高める上で、非常に有効かつ重要なことである。

そこで、本研究では、校内研究の実態を踏まえた上で、授業研究を主とした校内研究の意義とその有効な方法を吟味し、教師の力量を高めるための校内研究のあり方を示すこと、また、それを進めるための資料の開発及びその活用方法を示すことを課題とした。

II 研究の方法

1 基礎研究

校内研究運営に関する過去の研究を調べるとともに、校内研究の目的・意義・普遍的価値・問題点などについて文献研究を行った。

2 調査研究

小学校における校内研究運営の現状を理解し、校内研究における課題を見いだすため、都内数校の校内研究会への参加とアンケートによる調査を行った。

3 実践研究

継続観察ができる所属校の校内研究の運営にかかわり、授業観察を中心に分析を進め、実際に校内研究での学びを授業力の向上に結び付ける実践を行った。

III 研究の結果

1 調査研究による校内研究の実態

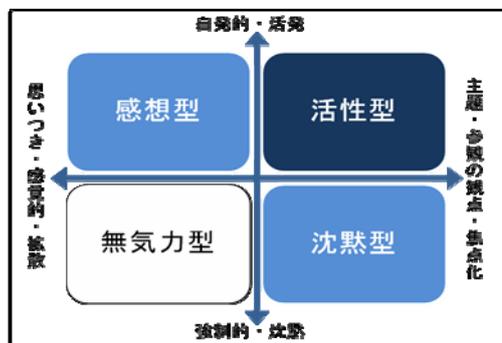
(1) アンケート調査結果とその考察

都内の3地区の小学校にアンケートを依頼した。そこから得られた校内研究の実態のうち、本研究の課題として考えられることは以下の4点である。

- ① 研究授業の授業者決定は関係学年に任されることが多い。授業者を学校全体として計画的に選び、授業力の育成を図ることができているとは言えない。
- ② 研究協議会は限られた時間の中で多くのことを行わなければならない、協議に十分な時間がとれない。
- ③ 協議会での課題として、「協議のテーマがぶれる」「深く検討しきれない」「一部の人に発言が偏る」「若手教員の発言が少ない」などが挙げられている。
- ④ 経験の異なる一人一人の課題に対応できる共通項を見つけることや教員の研究に関する理解の足並みを揃えることが難しい。

(2) 他校の校内研究参加による研究結果とその考察

8つの学校の研究会に参加して、学校によって研究のスタイルが全く違うことが分かった。特に研究協議会のもち方や内容は特徴的である。



(図1) 研究協議会のタイプ概念図

研究協議が研究主題に沿った内容で活発に行われれば、研究の理解を深めることができ、そこに参加した教師の学びも大きい。(図1)のように協議会の協議の質(横軸)と積極的関与(縦軸)の双方を高めることは、校内研究を授業力の向上に結び付けるために重要である。

(3) 調査研究から見いだした問題点

以上の調査研究を進めた結果、現在の校内研究の問題点は以下の3点ととらえた。

- ① 校長は校内研究に求めるものとして、教師の資質・能力の向上を第一に挙げている。しかし、校内研究が教師の資質・能力の向上に必ずしも結び付いていないという現状がある。
- ② 教師の経験年数の差などから、研究内容によっては、課題の共通理解を図ることが難しい。協議会も話題が焦点化できず、発言者に偏りがある。
- ③ 校内研究会で学んだ内容について、研究授業を行った当該学年以外ではそれを日々の実践に活用することができないことが多い。

多くの学校では、研究主題及び内容を深めていくことと、教師の資質・能力の向上とが必ずしも密接には結び付いていないと思われる。

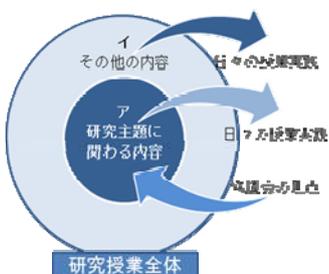
3 実践研究による校内研究活性化へのアプローチ

(1) 所属校における研究協議会の方法の工夫

所属校での研究授業において、グループ協議を採り入れるなど協議会を活性化する工夫を重ねていったが、全体での話し合いが自発的で活発な意見の交換に至らなかった。そこで、先進校を参考に、グループでの話し合いを構造化し、一つの概念化シートを作成するワークショップ型の協議会を実施した。

ワークショップ型の協議会を終えて、多くの人が主体的に意見を出し合え、授業のよい点や課題が浮き彫りになり、議論が深まるという点で有効な方法であるという結果が得られた。特に若手教員にとっては、様々な人の考えを聞くことで、授業を見る視点や指導観を学ぶことができると実感したことが分かった。また、最終的にどのような協議が行われたのかが目に見える形で残ることも有意義な点であった。

(2) 校内研究における教師の学びの意識化



(図2) 研究授業の学びのモデル

(図2)は研究授業の学びをモデル化したものである。校内研究は主題を設定し、それに向かって研究を進める。各研究授業において研究主題に深く切り込もうとすると、当然協議

会は話し合いを焦点化しなければならない。

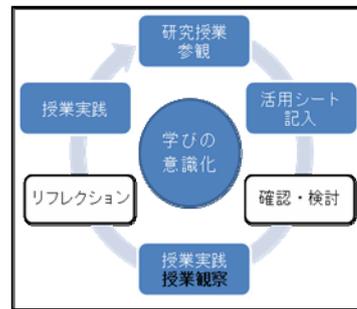
研究主題に深く切り込むことが、各教師の授業力の向上に直接結びつけば問題はない。しかし、そうでない場合には、アの研究主題にかかわる部分を中心に置きながらも、イのその他の部分の学びも重視する研究

の進め方を考慮することが大切である。主題に迫る研究を推進しつつ、教師の授業力全般の向上を考える時、研究授業での学びを研究主題の内容だけでなく授業全体のものとして捉え、それを意識化することが必要と考える。

そこで、研究授業での学びを日々の授業に活かす意識を高める目的で『研究授業活用シート』を作成し、研究会後に全教師に記述してもらうことにした。

活用シートには項目別に自分が学んだことを記述する。その後、内容について、どのような意図で書いたものなのか、確認・検討するという作業を経て、日々の授業でどれだけ実践されているかを、授業観察を通して検証し、それをまた本人に還元するようにした。

このようなサイクル(図3)で研究授業の学びを意識することで、結果として活用シートに記述したことが授業の実践の中で見られ、研究授業の回を追うごとにそれが定着していくことが見取れた。



(図3) 学びの意識化サイクル

IV 考察

1 ワークショップ型研究協議会の導入について

研究授業後の協議会を活性化することは、研究内容を深めるだけでなく、個々の教師の学びを深め、授業力を向上させる。ワークショップ型の協議会を導入することで、協議会を活性化することができる。ワークショップでの集団の学び合いが、一人一人の課題意識を高め、個人の力量形成に深く関与する形で有効に作用していると考えられるからである。

ただし、研究の内容等によって、どのようなワークショップを行うのか十分吟味する必要がある。

2 研究授業の学びの意識化について

校内研究で意識した学びは日常の授業で実践され、定着していくことが見取れた。また、回数を追うごとに、研究対象者の研究授業での学びについてのシートの記述量が増え、授業の内容や指導法・研究主題に関する意識の高まりも見取れた。『研究授業活用シート』を使った学びの意識化サイクルの構築は、基礎的なことも含めた教師の授業力向上に有効であると言える。

校内研究、特に研究授業における学びを授業力向上につなげるためのこの方策は、学年や研究分科会などチームで行うことが前提となる。上記の「学びの意識化サイクル」をOJTシステムに組み込むことで、現実的な実践として可能となる。